

長崎県感染症発生動向調査速報

平成26年第1週 平成25年12月30日（月）～平成26年1月5日（日）

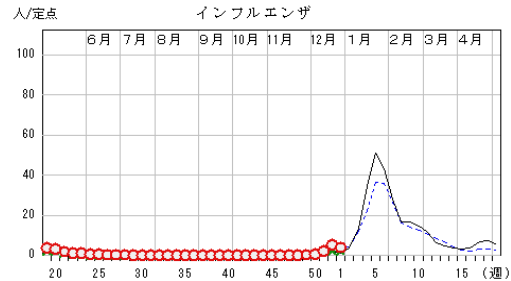
☆定点報告疾患（定点当たり報告数の上位3疾患）の発生状況

(1) インフルエンザ

第01週の報告数は271人で、前週より100人少なく、定点当たりの報告数は3.87であった。

年齢別では、10～14歳（50人）、30～39歳（30人）、20～29歳（27人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、県北保健所（12.75）、上五島保健所（7.67）、佐世保市保健所（5.73）が多かった。

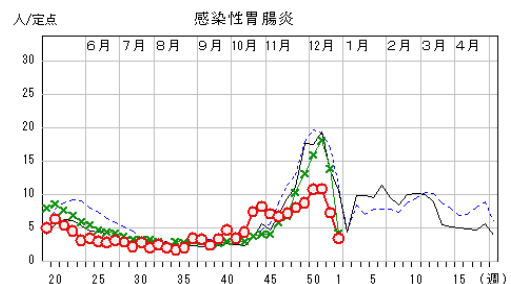


(2) 感染性胃腸炎

第01週の報告数は151人で、前週より169人少なく、定点当たりの報告数は3.43であった。

年齢別では、2歳（18人）、10～14歳（18人）、3歳（15人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、県央保健所（5.50）、長崎市保健所（4.50）、西彼保健所（4.50）が多かった。

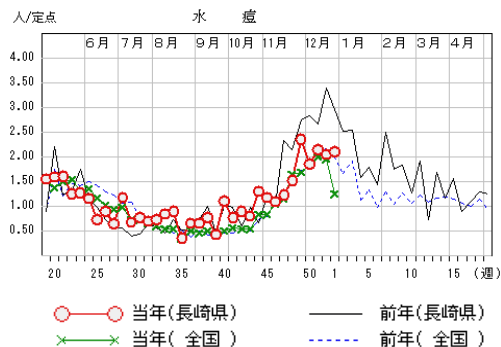


(3) 水痘

第01週の報告数は93人で、前週より3人多く、定点当たりの報告数は2.11であった。

年齢別では、2歳（20人）、1歳（17人）、4歳（16人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、対馬保健所（5.50）、県北保健所（3.67）、西彼保健所（2.50）が多かった。



☆トピックス・季節情報

【インフルエンザ】

長崎県における第1週の報告数は前週より100人減少して271人となり、定点当たりの人数は3.87でした。先週より減少はしていますが長崎県下すべての地区から報告が上がっています。県北地区12.75は注意報レベル「10」を超えていますので今後の動向に注意していく必要があります。

例年、地方におけるインフルエンザの流行は年末年始の帰省客によって都市部より持込まれたウイルスに端を発して、本格的な流行が始まり、1月下旬～2月上旬に流行のピークを迎えます。年齢別にみると、10代の学生が多く、学校での流行がみられます。新学期が始まり、学校等で人と接する機会も多くなりますので感染予防を心掛けましょう。

インフルエンザには抗インフルエンザ薬がありますが、予防にはワクチン接種が有効な手段の一つです。小さいお子さんや高齢者はもとより、受験生の方も体調管理に十分に気をつけましょう。また、外出からの帰宅時のうがい・手洗いの励行や、マスクなどによる「咳エチケット」で積極的な感染防止に努めましょう。

【感染性胃腸炎】

第1週の感染性胃腸炎の報告数は前週より169人減少して151人となり、定点当たりの人数は3.43でした。壱岐地区を除くすべての地区から散発的に報告があがっています。

ウイルス性感染性胃腸炎は本格的な流行シーズンに入っていますので、今後の動向に注視し、手洗いの励行を心がけましょう。

感染性胃腸炎は、細菌又はウイルスなどの病原微生物による嘔吐、下痢を主症状とする感染症です。年齢別に見ると、報告の多くは1～2歳の乳幼児が占めています。原因はロタウイルス、ノロウイルスをはじめとするカリシウイルス、エンテロウイルス、アデノウイルスなどのウイルス感染による場合が主流ですが、腸管出血性大腸菌などの細菌が原因となる場合もあります。

原因微生物のうち、ロタウイルスについてはすでにワクチンが認可されていますので、予防することが出来るウイルスです。特に、小さいお子さんがいらっしゃるご家庭では、保護者の方が手洗いの励行、体調管理や体調の変化に心掛けてあげるなどして感染防止に努め、早目に医療機関を受診させてあげるようにしましょう。

【水痘】

長崎県における第1週の報告数は、前週より3人増加して93人となり、定点当たりの人数は2.11でした。五島、上五島地区を除くすべての地区から散発的に報告があがっています。対馬地区では5.50と注意報レベル「4」を超えていますので今後の動向に注意していく必要があります。

この疾病は、例年冬場に患者数が増加する傾向にありますので、今後の動向に注視していく必要があります。水痘は水疱瘡（みずぼうそう）とも呼ばれ、原因となる水痘帯状疱疹ウイルスは伝播力が強く、ウイルスを含む飛沫あるいは飛沫核を経気道的に吸入することによる飛沫感染、あるいは水疱の内容液と触れることによる接触感染により感染が成立します。手洗いの励行、体調管理に心がけ感染防止に努めましょう。

☆トピックス：インフルエンザの流行に備えましょう。

◎インフルエンザは、インフルエンザウイルスを病原とする気道感染症です。他の原因によるかぜ症候群より重症化しやすい傾向がありますので注意を要します。1～3日間の潜伏期間のあとに38℃以上の発熱、頭痛、全身倦怠感、筋肉痛・関節痛などの全身症状が突然現れます。これに続いて咳、鼻汁などの上気道炎症が起こり、約1週間ほどで軽快するのが典型的なインフルエンザの症状です。呼吸器、循環器等に慢性疾患を持つ方は、その病状が悪化することもあります。小さなお子さんの場合、熱性痙攣や気管支喘息を誘発することもあります。

インフルエンザの流行パターンを全国レベルで見ると、例年11月下旬から12月上旬頃に流行が始まり、年が明けて1～3月頃に患者数のピークを迎えます。ところが、大都市を除く地方では年末年始の帰省時期後の新年第1週から流行が始まり、以後患者数が急増して1月下旬から2月上旬にかけてピークに達する傾向にあり、本県も同様の流行パターンで推移しています。基本的には4～5月にかけて患者数が減少していきますが、ここ数年は春先に小規模な流行が再燃する傾向にあります。

感染経路は、咳やくしゃみの飛沫による飛沫感染と、飛沫等に含まれるウイルスが付着した手指で自分の眼や口、鼻を触ることによって成立する接触感染があります。

予防には、ワクチン接種をはじめ、日頃からしっかりと休養をとり、バランスの良い食事を摂ることで免疫力を維持することが重要です。また、上記のような経路で感染が成立するため、手洗いの励行、外出先から帰宅した際のうがいの徹底なども有効です。

当センターに搬入された、今シーズン3回目のインフルエンザウイルスサーベイランスの検体から、インフルエンザウイルスB型およびA/H3型の遺伝子が検出されました。

今週に入り定点医療機関からの患者報告が急増しており、県内におけるインフルエンザ流行の兆しが見えます。全国的には、徐々に報告数が増えており、それに伴い学級閉鎖や学年閉鎖を行う施設も出てきているようです。これからの流行期に備えてインフルエンザウイルスワクチンの接種を心がけましょう。

<今冬のインフルエンザ総合対策について>

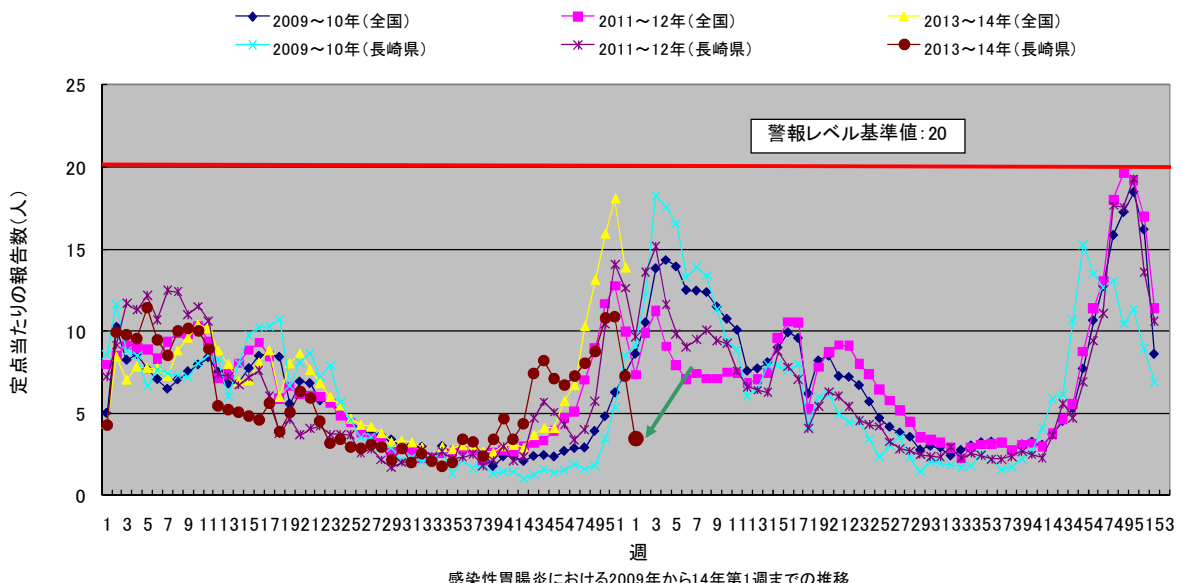
(参考) 厚生労働省ホームページ平成25年度今冬のインフルエンザ総合対策について

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/influenza/>

☆トピックス：感染性胃腸炎に注意しましょう。

昨シーズンは、全国的に感染性胃腸炎が流行し、過去10年で平成18年に次ぐ高い水準の患者数を示しました。本県においては、第52週に入り報告数は減少していますが、未だ高い数値を維持しています。

例年10月から11月にかけて流行の立ち上がりが見られ、12月中旬頃がピークとなる傾向にあることから、11月20日に、厚生労働省より「感染性胃腸炎の流行に伴うノロウイルスの予防啓発について」の通知が出ました。今後の動向に注視し、手洗いの励行に努めましょう。



感染性胃腸炎における2009年から14年第1週までの推移

<ノロウイルスに関するQ&A>

(参考) 厚生労働省ホームページ ノロウイルスに関するQ&A

<http://www.mhlw.go.jp/topics/syokuchu/kanren/yobou/040204-1.html>

